

カナモジカイ が めざす もの

わたしたち は、 にほんご の かきあらわし~かた に ついて かんがえ、その あるべき すがた を じつげん する ため に うんどう して います。

にほんご を かきあらわす の に は、 かんじ と かな が もちいられて いますが、 かんじ の かず の おおさ や つかいかた の ふごうりさ (ひとつ の かんじ に よみかた が いくつ も ある など) の ため、 にほんご の ひょうき~ほう は、 せかい に れい の ない ふくざつ な もの と なって おり、 ひ~こうりつ や さまざま な わざわい を もたらして います。 カナモジカイ は、 それら の かいけつ を めざして 1920ねん に そうりつ されました。

せんご の こくご かいかく —— これ に は、 カナモジカイ も おおきな こうけん を しました —— に よって もじ の よめない ひとは ほとんど いなくなりました。 また、 コンピューター など で かんじ を あつかう ぎじゅつ も ひやくてき に しんぽ しました。 しかし、 わたしたち は これで もんだい が かいけつ された とは かんがえて いません。

1. かんじ は、 にほんご を ただしく かきあらわす こと が できない ふかんぜん な もじ です。

「私」という かんじ は 「わたし」とも 「わたくし」とも よめます。「明日」は 「あす」とも 「あした」とも 「みょうにち」とも よめます。どれ が ただしい よみ なの か は、 それ を かいた ひと に しか わかりません。「わたし」「わたくし」、「あす」「あした」「みょうにち」は、それぞれ いみ は ちかくて も べつ の ことば です から、 それら を くべつ できる よう に うつしだす こと が できなければ、 もじ と して の やくわり を はたして いる とは いえませんが、

2. かんじ は にほんご の でんとう を はかい しました。

にほん では がいらい の かんじ を ありがたがり、 ほんらい の じぶんたちの ことば で ある やまとことば (わご) を いやしんで きた

ため、おおくの やまとことば が ほろび、 かんご に とって かわられました。

かんじ は、 いきのこった やまとことば に も おおきな つめあと を のこしました。「くさい」と「くさる」、「おもい」と「おもな」は、にほんご としては きょうだい の ことば ですが、 ちゅうごくご に ならって 「臭い」「腐る」、「重い」「主な」と、 ことなる かんじ を あてて かきわける ため、 それぞれ の ことば の かんけい が わからなくなり、 したがって、 ことば の ほんとう の いみ も わからなくなりました。

また、「微笑む」と かいて 「ほほえむ」と よませる こと も おこなわれて いますが、 これは ゆるすまじき こと です。「ほほえむ」と は ほんらい 「ほほが えむ」と いう いみ ですが、「微笑む」と かい た の では その こと が みえなくなり、「微(かす)か に わらう」と いう いみ に すりかわって しまいます。

3. かんじ は にほんご の はったつ を さまたげて きました。

にほん では、 ながい あいだ かんじ に いぞん して きた ため、 め で みれば いみ が わかって も、 みみ で きいて わからない かんご が あんい に つくられて きましたし、 いま も つくられて います (たとえば、「防汚」「放鳥」「廃農」など)。 また、 かんじ の おと は きわめて かぎられた もの である ため、 かんご の ほとんど は どうおん〜いぎご と なって しまいます。

そのため、 はなしことば と して の ちから が よわまった だけ でなく、 ほんらい の にほんご (やまとことば) による ぞうご〜ほう の はったつ が さまたげられ、「カタカナ〜ゴ」が ひつよう いじょう に ふえる げんいん の ひとつ とも になりました。

みみ で きいて わからない ことば でも、 じ を みれば いみ が わかる から かんじ は べんり だ、 など と かんがえる の は、 さかだち した かんがえ〜かた です。

4. かんじ は、 ことば の じゃくしゃ を うみだしました。

め の ふじゆう な ひとびと など に とって、 かんじ を まなぶ こと

は きわめて こんなん です。 にほんご を かんじ に いぞん する ことば の まま に して きた こと が おびたしい かず の みみ で きいて わからない ことば を つくりだして きた の で あり、 かんじ を つかわない ひとびと に たいする かべ を つくって きた の です。 この こと は、 かれら に たいする さべつ で ある と いても いいすぎ では ありません。

5. かんじ は、 きょういく の うえ で おもに と なって います。

せんご の こくご かいかく も、 かんじ の かず の おおさ や つかいかた の ふくざつさ に よる がくしゅう の むずかしさを いくら か やわらげた に すぎません。 そのため、 ほんらい は ことば の うつわ で ある はず の もじ の がくしゅう —— その だいぶぶん は かんじ の がくしゅう —— が おもい ふたん と なって います。 がっこう の 「こくご がくしゅう」 は 「かんじ がくしゅう」 に かたよった もの に なって います。

6. かんじ は、 がいこくじん に とつて も おおきな かべ と なって います。

にほんご は、 はつおん も ぶんぼう も けつして むずかしい げんご では なく、 まなんだ がいこくじん は、 はなす だけ なら、 それほど の ころう は ない と いわれます。 かんじ が かべ と なり、 がいこくじんの にほんご を まなぼう と する いよく を そぎ、 にほん の しゃかい への さんか を とざして さえ いる の は、 とても ざんねん な こと です。

にほん の がっこう で まなぶ がいこくじんの こども が にほんご を みに つける こと が できず に おちこぼれて いく の は しんこく な しゃかい もんだい に なって いますが、 かんじ の むずかしさが その げんいんの ひとつ で ある こと は うたがい~よう も ありません。

7. かんじ は、 しゃかい せいかつ の のうりつ を ひくい もの に して います。

いま は、 コンピューター など で かんじ を —— いぜん に くらべれば —— たやすく あつかう こと が できます。 しかし、 かんじ への へんかんと

いう さぎょう が のうりつ を おおきく さまたげて います。

かんじ は つかいこなす こと が むずかしく、かき~まちがい や へんかん~ミス、よみ~まちがい が しばしば おこります。おくりがな の つけかた など まよう こと も すくなく ありません。(問合せ? 問合わせ? 問い合せ? 問い合わせ?) これは、じかんの むだ です。

かんじ の もたらした わざわいは まだまだ ありますが、ここ では はぶきます。

カナモジカイ の もくてきを ひとこと で いえば、かんじ を はいし すること によって にほんご の かきあらわし~かた を ごうりか し、にほんご の でんとう を まもり、かつ にほんご の ほんらい の せいめい~りよく を はなひらかせよう と いう こと です。

もっと みじかく いえば、にほんご を あいし、たいせつ に して いこう と いう こと です。

この もくてきを じつげん する ため、カナモジカイ では、かたかな だけで ぶんしょう を かく こと を うったえて きました。その ため、かたかな だけで かいて も よみやすい デザイン の カナモジ したい (「かたせんがな」と いいます。) を つくる などの かつどう を して きました。

さしあたって は、ひらがな でも よい の です。かんじ に たよらない にほんご を そだてて いきましょう。みなさん も ぜひ わたしたち の なかま に くわわって ください。